

共同体における 一人ひとりの存在と働き

一教区シノドス、大陸別シノドス 及び 世界の小教区司祭のシノドスに参加して一

カトリック大阪高松大司教区

司祭 高山 徹

導入

■本日分かち合うこと：

本年度の京都教区のテーマは「共同体づくり」と伺いました。今、盛んに叫ばれているシノドス的な教会像は、すべての人がともに歩む教会とされており、まさに共同体づくりに繋がるモットーです。本日は、発表者個人の体験を分かち合わせて頂きながら、シノドス的な教会や「共同体づくり」について、「1人ひとりの存在と働き」という観点からお話させていただきます。

2024年発行の『シノドスハンドブック』には、次のように書かれています。

より「ともに歩む」教会となっていくためには欠かせないものがあります。

①立場の異なる人を尊重し、ともに共同体を作る。②ともに祈り、祈りを分かち合う。そして、分かち合ったものをともに聞く。③神が望んでおられることにともに気づく。¹

そして、シノドス的な教会の特徴を「ともにある教会」、「ともに担う教会」「ともに考え、祈り、識別する教会」としています。²

■質問：

- ① “私”の良さは何ですか？“私”と“ともに歩む人”の良さは何ですか？
- ② “私”にとって、共同体とは何でしょうか？

<□(以下 Power Point による発表の内容要旨) □↓↓↓> *ビデオ形式

*シノドスは 元のギリシア語の意味は「ともに歩む」ですが 用語としては会議の名称(世界代表司教会議)として使われて参りました。

→教皇様(フランシスコ教皇・レオ14世教皇)は この意味に立ち返って シノドスをとらえ呼び掛けておられます。あるテーマについて、みんなで共に祈り・共に分かち合うことが求められています。

※2021-2024年にかけてのシノドスの歩み

小教区レベル→地区レベル→教区レベル→国レベル→大陸レベル→シノドス総会/小教区司祭の集い

¹ 日本カトリック司教協議会(2024)『シノドスハンドブック』カトリック中央協議会、8頁。

² 同上、9頁。



1. はじめに

教区ステージにおける書記の体験、バンコクでの大陸別シノドスでの体験の分かち合い
発表者は、この大陸別シノドスを通して、「一人ひとりの存在の意義」を感じさせて頂いた。

2. 本プレゼンの主題

(1) 本プレゼンのトピック

・世界の小教区司祭のシノドスで見たこと、感じたこと

(2) 本プレゼンの主題と目的

- ・2024年4月28～5月2日、ローマ・サクロファノーで開催された世界の小教区司祭のシノドスの概要を参加者として主体的に報告し分かち合う。
- ・現場の司祭としてシノドスのうねりを続けることを提起。

3. 参加者としての視座

一人ひとりが自ら祈り、思考することこそがシノドスの基盤。一人ひとりの存在の意義

4. 本論[「小教区司祭のシノドス」開催経緯、実施状況]

(1) 「小教区司祭のシノドス」の開催経緯

- ・第16回世界代表司教会議において、現場の小教区司祭の声を聴く必要性が提起された

(2) 「小教区司祭のシノドス」の目指すところ、テーマ

- ・シノドス第二会期に向け、小教区司祭としての現場の体験を分かち合い、提言
- ・全体テーマ「How to be a synodal local Church in mission?」

(3) 「小教区司祭のシノドス」のスケジュール

■1日目～4日目（於：Sacrofano）分かち合い、共に過ごす

◇大体の流れ [*初日は移動日]

- 8:00 祈り ○8:30 講演 ○9:30 黙想 ○10:00 霊における会話 ○12:45 昼食
 - 15:00 グループ発表 ○16:30 コーヒーブレイク ○17:30 グループ発表
 - 18:00 グループ活動 ○18:45 ミサ ○20:00 夕食 ○21:00 自由時間
- (*4月30日は23時近くまで、フリーセッションあり)

◇日毎のテーマ (*4月28日(日)にバチカンに集合し、会場にバスで向かいました。)

▼シノドス的な教会とは(4月29日)

▼全ての人が使徒、宣教者(4月30日)

▼絆を育て、共同体を形成する(5月1日)

◇基調講演(5名)

◇グループによる霊における会話、各グループの発表

◇夕暮れにミサ(*日毎に特定言語(英語、スペイン語、イタリア語)*一度東方典礼)

*最終日前晩には、アジアの会合がありました。

■5日目 (於:バチカン) 本会合のまとめ

◇教皇様との対話(*教皇様は、全体会后、参加者一人ひとりと握手を交わした)

◇閉会ミサ(聖ペトロ大聖堂、司式はマリア・グレッグ枢機卿司式、イタリア語)

(4) 「小教区司祭のシノドス」の参加者

*教皇庁からの参加者

◇聖職者省

(長官)ユ・フンシク(兪興植)枢機卿

◇シノドス事務局

(事務局長)マリオ・グレッグ枢機卿、(事務局次長)ルイス・マリン司教/Sr. ナタリー・ベカー

(特別秘書)ジャコモ・コスタ神父、(担当枢機卿)ジャンクロード・オロリッシュ枢機卿

◇福音宣教省

Msgr. Hyacinthe Dioné

*各国からの参加者総数

◇全体・・・100カ国、195人の司祭

(5) 参加者へのインタビュー

デイヴィッド神父(オーストラリア)

5. 所感[参加者として感じたこと]

- ・小教区司祭としての痛み、挫折、喜び、希望。各現場特有の背景。
- ・この地球上に沢山の小教区があり、互いに繋がっている。中心にキリスト。
- ・一人ひとりが、自分の頭で考え、自分の心で祈りたおし、自分も人も大事にする。

6. 終わりに代えて

- (1) 全体を通して・・・「私達司祭」のフレーズ
- (2) 個人的な発言・・・共同識別の基盤には、個々人の識別。「凡庸な悪」の危険
- (3) 小グループでのわかち合い・・・養成、サポート、ハーモニー、根幹にキリスト

＜□(以上 Power Point による発表の内容要旨) □↑↑↑＞

結語 シノドス的な教会となっていくため

- 1人ひとりが、ともに 懸命に祈る。
- 1人ひとりが、ともに 神様の恵み・出会いに感謝する。
- 1人ひとりが、ともに その人らしく誠実に生きる。

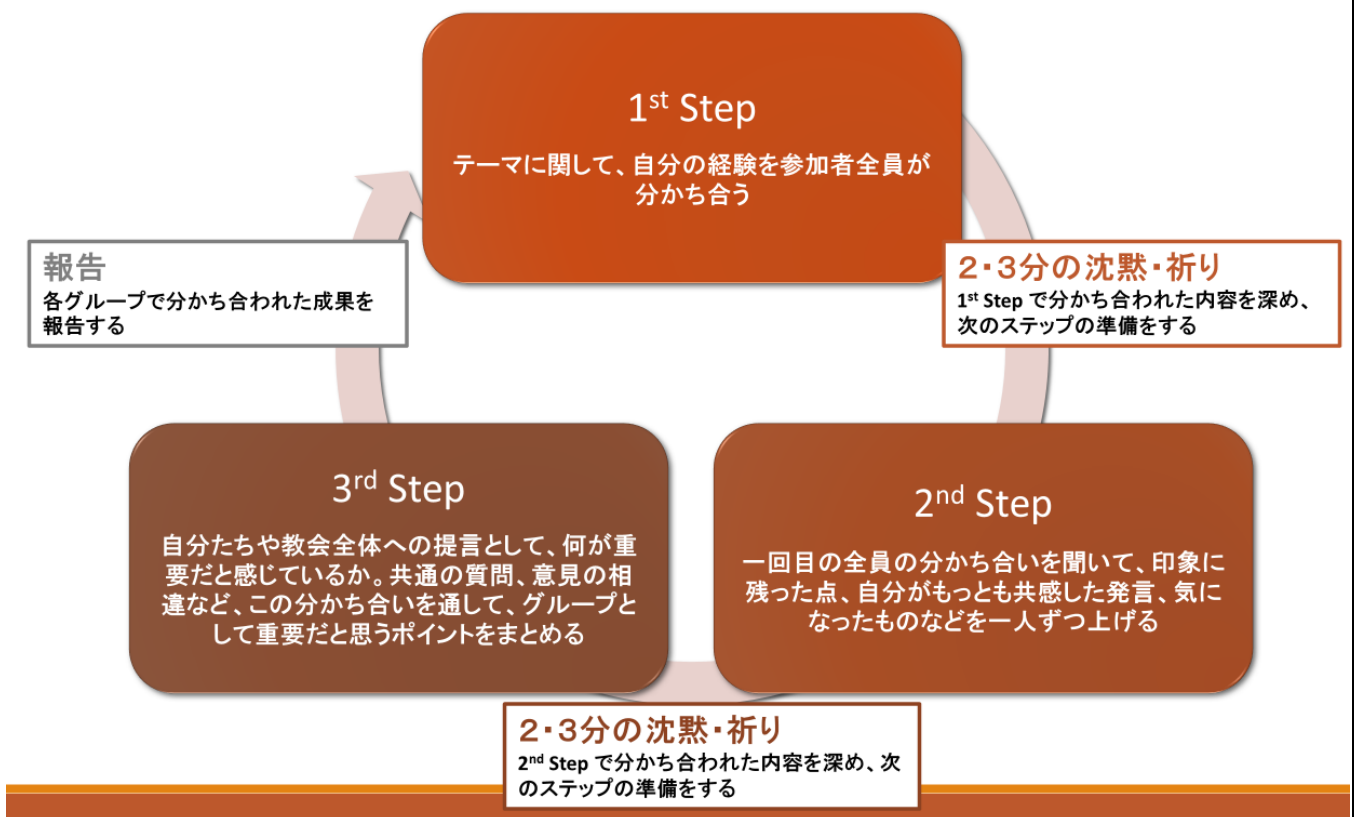
<追記>

2025年10月26日、シノドス第二会期総会は『最終文書』を採択。

そして、2028年10月の教会会議を目指し、改めて 小教区、教区、国、大陸レベルでの検討。

補足資料

< 霊における会話のプロセス >



世界の小教区司祭のシノドス グループ10の分かち合いレポート (2024年4月29日)

「シノドス的な教会」

—シノドス的な教会の歩みの中で司牧者としての喜びと悲しみは何ですか?—

私達は、一人ひとりの視座を広げてくれるような分かち合いによって、豊かにされ且つ閃きも受けています。シノダリティのプロセスがいかに関係性（体験の分かち合い）から有効性（実行すること）へと移るかを私達は目の当たりにしています。それぞれの小教区の現場において多くのシノドス的な動きがあります。これらはしばしば、いわば、マイクロ・シノダリティと言えるものです。すなわち、小さなグループがそのメンバーが深く参画するように促し、多くの奉仕者のリストをつくることで、その動きが小教区の多様な要素からなる司牧評議員会にまで広がり、引いては共同体全体が一つの評議会、小教区となるまで至るということです。シノドス的なありかたは決して単一のものではなく、文脈によって変わってくるものです。しかしながら、それらの共通の基盤には、シノドス的なリーダーシップというものがあります。これは、私達の司牧にゆだねられた神の民に注意深く耳を傾け彼らから学ぶということであり、様々なレベルでの彼らの参加を促すということ、そして、ある一定の方向性で皆が働くように導くということです。シノドス的なリーダーシップは、「近しさ」「柔軟性」「親しさ」が含まれます。これは、司祭が互いを思いやることから始まり、そして、その雰囲気が共同体全体と一人ひとりの関係において広がっていくのであります。このことが、ケアする共同体を創出し、その結果、宣教へ向けた共同責任を担うすべての洗礼を受けた人々の参画を生むのです。このことは、しかしながら、司牧者を批判にさらしやすくしてしまうし、シノダリティが時としては攻撃的な計略にさらされる可能性を持っているゆえに、司牧者へのサポートが必要となることは留意せねばなりません。ゆえに、権威を示すことと信徒のエンパワーメントの間のバランスは、極端な偏りをさけるように、非常に慎重な検討を必要としているのです。この挑戦は、聖職者と信徒の単なるパワープレーとなる可能性も持っています。シノドス的なリーダーシップは、そのための養成を必要としています。その養成は具体的なスキルの発達のことでもありますが、結局のところそれは、謙遜の精神の涵養と言えます。

世界の小教区司祭のシノドス グループ10の分かち合いレポート (2024年4月30日)

「全ての人が使徒、宣教者」

—シノドス的な教会の歩みの中でどのように様々な賜物や奉仕職が協働していますか?—

イエスはボランティアを要請してはいませんでした。代わりに、彼は人々を使徒として個人的に招きました。だから私達も、人々を小教区共同体そのものに、その奉仕職や活動に招くのです。それは、小教区共同体のメンバーだけではなくフィデイドヌム司祭達も含む人々を対象としています。この点を受けとめることで、シノドス的なリーダーとして、私達がカリスマというものの本質を理解する必要性に気づかされます。すなわち、小教区共同体の中で人々が何を語っているのかをきちんと理解しそれを受けとめるという、受容の精神と技能を有するという事です。また、奉仕職を担っていくように、彼らに任命を与えていくという事です。こうすることによって、小教区における個々人の存在を確かなものとした尊敬することになります。そして、このような司牧者の態度と働きによって、人々は、個々人の関心のある領域の奉仕にとどまらず、教会全体に貢献するにはどのような働きが可能であるかを察知できるようになるのであります。このことは、小教区における人や物事を歓迎するような精神と歓迎するような働きを育てていくことによって始まっていくのであり、その効果は決して軽んじてはいけません。まさに聖霊降臨の出来事といえます。洗礼において、聖霊の力が一人ひとりに注がれていくのと同じです。それこそがエウカリスティアの精神であり、宣教の使命において私たちはその精神を土台に派遣されています。外に向く力強い奉仕職の事例、とりわけ教会と縁のない所や周縁の地域に己を顧みないで向かう事例も聞きました。こうした事例は、非常に重要な福音宣教の取り組みであります。特に重要であるのは、カリスマについての識別は祈りなしには行われえないということであり、祈りは、待つ時間であり、寝る間を惜しんで祈る心を育てるのです。動機を純粹なものへと変えるのです。霊がそれぞれの共同体に向け、すべてのカリスマというわけではなく、主が望んでおられることを実現するために必要とする人々に注がれているということこそが、司牧の場でしかと耳を傾ける上での土台であります。だからこそ、祈りは信頼関係の基盤となるのです。個々のカリスマに期待することは、自分の力であらゆることを背負うことから小教区現場を解放します。それは、コミュニケーションや相談することや協力関係を促進します。さらに、このことによって、人々の関わりを増し、新しいいのちを吹き込む霊の導きもあいまって、新しいネットワークを構築することになります。このことは、まさにこの会期中、私達が、共に一人ひとりの経験を分かち合い、一人ひとりの経験談に耳を傾ける中で具体的に体験しています。小教区レベルや教区レベルで、カリスマや奉仕職のオーケストラの音色の生じる場を私達司牧者の取り組みで実現できるならば、まさにその時私達司牧者の心は沸き立ちます。具体的なカリスマがもっと識別され且つ知られていくためにも、ここまで述べてきたことを実現するためには、司祭候補者の養成において、新たな方向性を必要とします。いずれにせよ新しい挑戦です。しかし、また、大きな希望も存しているのです。